

## 第二節 地域語

地方ごとに言葉の違いがある。それは、それぞれの土地の風土に根づいて語り継がれてきたものであろう。

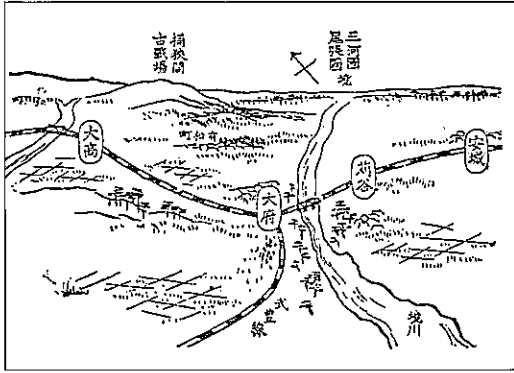
大府市域の村むらで、古くから交わされてきた言葉を、仮におおぶことば(文中ではゴチック体で示す)と呼ぶことにする。

### 一、ことばの特徴

#### (一) 尾三の言葉

愛知県は、日本の言語を二分する東日本(関東)方言と、西日本(関西)方言の接触地帯に位置しているため、両者の影響を受けることになる。しかし、県内でも三河地方は関東方言的であり、尾張地方は関西方言的であるといわれる。

大府市域は、尾張に属し



尾三の境図 東海道唱歌(明42)より

ているというものの三河と隣接しており、古くから生活圏に三河が取り込まれていた。そのためおおぶことばは、尾張と三河の両方言が混用されてきた。「捨てる」とか、「投げる」ことを尾張方言では、「ホカル」といい、三河方言では「ホーカル」という。ところで、おおぶことばは、ホカルの尾張方言と同じである。ところが、「縮れ毛」のことを尾張で「チシュー」「三河で「チンシュー」という。おおぶことばは、三河のチンシューである。

#### (二) 促音化

名古屋は、国内でも夏の暑さでは特別にアツツイ地域に入るといわれる。名古屋近郊にある大府もやはり例外ではない。

このアツツイは、暑い(アツイ)の第二音節に促音が出たもので、おおぶことばにはこんな場合は幾つもある。



アツツイ夏

薄 い→ウッスイ  
 美しい→ウツクシイ  
 こすい→コッスイ  
 嘘 →ウツソ  
 臭 い→クツサイ  
 低 い→ヒックイ

(三) 変母音

夏の夜には、オンガイ話が語られる。肝だめしの事前行事としては欠かせないものである。このオンガイという言葉のもと、関西方言のオソロシイと関東方言のコワイが混合してオンゴワイとなったものらしい。

日本語は、a・i・u・e・oの五つの母音からなっているが、この地方には、変母音 a (キヤー) が加わって六つになる。ところで、この母音は、a i (アイ) の二重母音のときに表われる。だからオンガイは、オンギヤーになる

蚕 →キヤーコ 財布→シヤーフ  
 太鼓→タアーコ ない→ニヤー  
 入る→ヒヤール 参る→ミヤール  
 うまい→ウミヤール

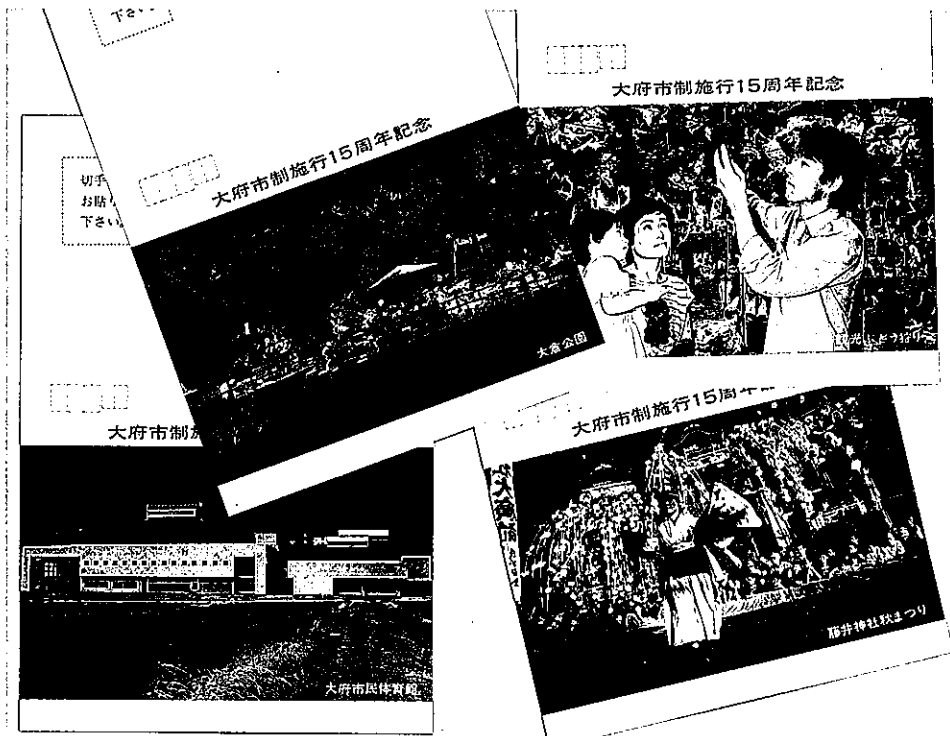
(四) 音の移動

この地方の夏の暑さもさることながら、伊吹おろしの吹く冬の寒さも厳しい。サバイ(寒い)ときはカラド(体)を動かすにかぎる。

サバイは、寒い(サムイ)の m u (マ行のム) が b u (バ行のブ) に移動してしまったものであり、カラドは体(カラダ) d a (ア段のダ) が d o (オ段のド) に変わってしまったものである。このように音の移動したおおぶことばは多く耳にする。

行の移動(子音の転移)

d → z	熊手 → クマゼ	撫る → ナゼル
d → s	届く → トゾク	
h → s	人 → シト	単衣 → シトエ
m → b	煙 → ケブリ	紐 → ヒボ
s → h	狭い → セバイ	叱る → ヒカル
	捨る → フテル	
段の移動(母音の転移)		
a → i	逆さま → サカシマ	
a → o	体 → カラド	
i → a	一人子 → ヒトラゴ	
i → e	入れる → エレル	みみず → メメズ
u → a	唇 → クチヒラ	
u → i	動く → イゴク	植える → イエル
	明るい → アカリイ	



大府のエガハキ

音の転換（音の逆立ち）

o → u	遊 ぶ → アスブ	風呂敷 → フルシキ	本 当 → フント
o → a	も っ と → マット		
e → a	返 す → カヤス		
e → i	鉛 筆 → インピツ		
u → o	脱 ぐ → ノグ		
u → e	少 い → スケナイ		
	雲 霞 → オンカ		
	産 着 → オブギ		
	眉 毛 → マイゲ		
	同 じ → ウンナシ		
	茶 釜 → チャマガ		

(ii) 音の添加や脱落

寒いときは、体がチヂカムので動きがにぶくなる。この場合のチヂカムは、縮む（チヂム）に「カ」が添加されたものである。おおぶことばには、音の加除、あるいは音の長、短音化することがままある。

音の添加

石	→ イシナ	株	→ カブツ
消 す	→ ケヤス	狙	う → ネットラウ
方 々	→ ホボカ		
		な す	→ ナスビ

ねぎ → ネブカ

音の脱落

堪忍 → カニ

この間 → コナイダ

たやすい → アヤスイ

俵 → タアラ

所 → トコ

ゆでる → ウデル

逆根 → レンコ

涎<sup>よだか</sup>れ → ヨド

音の長音化

蛭 → ヒール

音の短音化

ほうき → ホキ

線香 → センコ

貧乏 → ビンボ

端 → ハシッポ

けれど → ケド

頂戴 → チョー

鯉ぶし → カツアシ

大根 → ダイコ

惜しい → オシイ

用事 → ヨー

荷なう → イナウ

者・物 → モン

洩る → モール

砂糖 → サト

どじょう → ドジョ

(六) 意味の転換

寒い日の外出には、それなりのマワシをしなくてはならない。マワシというのは、おおぶことばでは相撲のまわしではなくて、準備、用意、支度という意味である。これは、「手回しよく」「根回しする」の回しからきたことばである。

このように、おおぶことばには共通語と異なる意味に使われることばがある。

アイダ(サ) | 間 | 平常・普段

ウツクシイ | 美しい | すっかり・すべて

エライ | 偉い | 疲れる・難儀な・大変な

ツル(ツル) | 吊る・釣る | (二人で) 物を持ち上げる

ヒョー | 日雇 | 蕎の人・建築業者

ホンノリ | 一かすかに | すっかり・全く

ヤカマシイ | 喧しい | 忙しい・多忙な

(七) 助動詞

寒いときには、寒さを吹き飛ばすために「走ろマイカ」ということになる。「マイ」は、「まじ」の口語化したもので、打ち消しの推量とか、否定の意志を表わす語であるが、おおぶことばではマイの下にカをつけて「マイカ」とし、勧誘の意味を表わす。

動詞にマイ(カ)をつけて、

誘いの意味を表わす。

走ろマイ(カ)

書こマイ(カ)

動詞にセンをつけて、



机をツル

否定の意志を表わす。

走りヤセン

書きヤセン

動詞にヒン・ヘンをつけて、可能の否定を表わす。

走れやヒン（ヘン）

書けやヒン（ヘン）

動詞にスカをつけて、推量の否定を表わす。また、語勢を強める働きもする。

走れスカ

書けスカ

動詞にダラーをつけて、推量を表わす。

走れるダラー

書けるダラー

動詞にゲナをつけて、伝聞を表わす。

走るゲナ

書くゲナ

動詞にトクレンをつけて、依頼を表わす。

走ってトクレン

書いてトクレン

動詞の連用形の語尾を發音化して、命令を表わす。

走りン

書きン（書きリシ）

動詞にカスをつけて、行為を強調し

たり、能動性を表わしたりする。

走らカス

冷まカス

騙カス

動詞にクルをつける場合がある。特

に意味が加わるわけではないが、言



画用紙にエドクル

いやさきからでたものと思われる。

絵どクル

掘じクル

塗るクル

(六) 終助詞

「きょうは、暑いナン」「そうだナン」など、おおぶことばでは、ナンは「……ね」に相当するもので、文末表現としてよく使われる終助詞である。終助詞では、そのほかに「モン・「カン・「ガン・「ダンが使われる。ゝかね・ゝがね・ゝだねが変化したものである。終助詞は、話す人の態度も意志を表わすものであるが、それに対して聞き手は、ホーカンと合槌をうつ。相手によってはホーカにもなる。

(七) 接続語

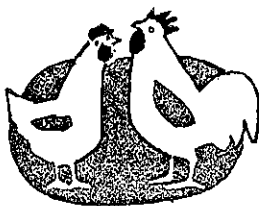
「この暑さの中、太郎サの嫁ゴは、よく働くなあ」のサは、「さん」とか、「様」といったことばが略されたもので、親しみを込めた言い方である。ゴは、親近感を表す接尾語である。

サ……親近感を込めた言い方である。

嫁→ヨメサ（ゴ）

婢→カカサ

後家→ゴケサ



オンタ・メンタ

タ……親近感を込めた言い方である。

雄→オンタ 雌→メンタ 頸→アゴタ

首→クビツタマ 頬→ホータ 腿→モモタ

チヨ・チャ……親近感のあるものであるが、なかには蔑視の感

情のものもある。

左利き→ギツチヨ 横→ヨコツチヨ 脇→ワキツチヨ

無茶→ムチャクチャ 色あせたもの→ハゲツチヨロ

ベタ……「端」が訛つたもので、方向を表す語につける。

北端→キタベタ 右端→ミギベタ

ハナ……「端」が接尾語化して、ものの始まり、ものの突出した

ところといった意味を加える働きをする。

代つた直後→代りつパナ 先端・最初→チヨツパナ

寝た直後→寝っパナ

タイ……言い易くする。

円い→円くタイ 重い→重タイ

シマ……時を表す接尾語で、直ぐにという意味がある。

起きシマ・寝シマ・行キシマ

ときを表すことばは、次のようになっている。

オキシナ(起床直後)→アサツバラ(朝)→ヒンナカ(昼間)

→バンゲシマ(夕方)→バンゲ(晩)→ヨーサリ(夜)

キョウ、キンニョ→オトツイ→サキオトツイ

アシタ→アサツテ→シアサツテ

コトシ、キヨネン→オトツイシ  
ライネン→サライネン

## 二 おおぶ気質

「オアツーゴザンス」「寒いのでいつまでも寝てケツカル」等々言葉を通しておおぶ人の気質をうかがうことができる。

### (一) 挨拶

オアツーゴザンス(酷暑季)・オサムーゴザンス・サブイナン(冷寒季)とか、エエテンキダナン(晴天時)・エエオシメリデ・ヨールナン(雨天時)など、挨拶には気候に関することが多い。

朝の挨拶は、オハヨーゴザンスが一般的である。野良仕事を終えて家路を急ぐとき交わす挨拶は、オシミヤヤスという。

「おしまいなさい」の訛りで、一日が無事に終わったことの感謝の意味あいが感じさせられる。

他家を訪問したときは、ゴメンヤス

と言うと、オイデヤスと応じる。退

去する場合はオジヤマサンと言う。

また、ゴタイゲサンと言うのは、労

働や奇特な行為に対する感謝を示す



オハヨーゴザンス

言葉で、御苦勞様に通じる。オソーンサマは、もとは「御早々」で他家を訪ねて辞去するときという言葉であったが、それにサマがついてこれまでの「早いお帰り。」の意味が、「お粗末でした。」というふうに変化したものである。

## (二) 人付き合い

大府に限らず、この地方の人びとは人付き合いを大事にする。「そうは言ってもシカタガナイ。お互いにアンバヨーやってチョー。」と言うのは、この地方の人々の氣質がうかがわれる言葉である。

シカタガナイは、長いものにまかれる的な、卑屈で無気力な、事大主義的・順應主事的なひびきがある。アンバヨーは塩梅シズメヨクが訛ったもので、料理の塩加減から来た言葉である。八方事なかれの感がある。

それなら、「エコロカゲン（いい加減）にしておこう。」という投げやりな態度もないとはいえない。

## (三) 卑語

ケツカルは、よく使われる卑語である。何かをしている様子を言った言葉である。

走ってケツカル 書いてケツカル 見てケツカル

その過去形として「ガッタ」が使われる。

走りヤガッタ 書きヤガッタ 見ヤガッタ

また、動詞にガレをつけて「勝手にしろ」といった意味あいを表すこともある。

走りヤガレ 書きヤガレ 見ヤガレ

コクも卑語として一般的である。「放す・ひる」とか、「言う・ぬかす」の意味がある。

往生コク 損コク 嘘コク

「朝から坊主に会って、きょうはケツタクソが悪い。」と言う場合のケツタクソのケツタは、大阪弁のケツタイが移入されたものと思われるが、大阪弁の奇怪などは異なり、おおぶ言葉では縁起とか前兆という意味がある。「クソ」は、胸糞が悪いと同じ卑語の一つである。さらに、クソダアケ（大馬鹿野郎）という言葉もある。

## (四) 雑談

井戸端会議での雑談は、人の噂が中心となるのは今も昔も変わりがなく、面白いようである。そんなときに、人の性格を端的に表す言葉としてよく使われる言葉に、次のようなものがある。

エラマツ（いばった人） シミツタレ（だらしない人）

ケチンボ（けちな人） シブチン（欲ばりな人）

オコリバス（すぐ怒る人） テベソ（出歩くこと好きな人）

オトコバス（おてんば） ゴクドー（放蕩者）

ヤゴメ（寡婦） オトコヤゴメ（寡夫）

オーチャクモン（なまけ者） ナマクラ（はつきりしない人）

(五) 古語

ゴザルは御座居るの訳で、居る・ある・来る・行くなどの古典的な尊敬語である。これをおおぶことばでは、「先生がゴザツタ」というように「いらっしやった」という意味で使われている。

また、ゴブレイ(御無礼)は、礼儀のわきまえないぶしつけのことであるが、「失礼しました」と同様な意味で「ゴブレイしました」がよく使われる。

タワケ(戯者)やゴゼン(御膳||御飯)、オンシ(御主||御前)なども今に生きている。

(六) 色彩

人の気持ちは、正直者ほど顔色によく表われるといわれる。恥ずかしければ赤面し、恐ろしいときは蒼白になる。そうした顔色の変化を表す言葉に、アカナル・アオナルがある。

そのほか、色の変化を表すのにシロナルやクロナルがある。しかし、キイナル・ミドリナルなどとは言わない。

色相を表すのに、マツシロケ・マツカシケ・マツクロケ・マツサオケなどがある。ケは語勢を強めるはたらきをする。さらに、マツカツカというのものもある。

三 衣食住

(一) 着る

衣服のことをキモンあるいはキルモンという。

作業服をノラギまたはシゴトギと

言って、ジバンにモモヒキが一般的であった。それに季節によって、ドーギやハンテン・デンチ(デンチヨ)

を重ね着した。日常着は、フダンギ

とかツネギと言ったが、農村の暮し

では作業着との区別はほとんどなかった。

晴れの日や外出するときには、ヨソイキとかイツチヨラと言って、日常着のうち新しいものか、質のよいものを選んで着た。

(二) 食べる

食事はふつう一日三食で、アサメシ・ヒルメシ・バンメシ(ユメシ)と呼んだが、農繁期にはチャズケが加わって四食になることもあった。ムギメシやオジャ(雑炊)が主食で、オカズ(お菜)は野菜の煮つけが中心であって、白米飯・うどん・魚・ヒキズリ(鍋



ドーギ



物)を口にできるのは、稀であった。

晴れの日の特別食としては、コウエ(おこわ)やその代用のアカメシ、あるいはポタモチがつくられ、近所や親類にまで配られた。正月には、オカザリ(鏡餅)が、氏神の祭礼には巻ずしや揚げずしのほかに、オシズシ(ハコズシ)やバラズシがつくられた。

### (三) 住む

屋敷構えをヤシキと呼び、その中央北寄りの位置に、南向きにオリヤ(母屋)が建っているのが一般的である。

母屋の間取りは、広さに応じてヨハチ・ハチロク・ロクヨンといわれる田の字形に四部屋があり、ダイドコ(居間)・デエ(客間)・ナンド(寝室)・オカツテ(勝手)と呼んだ。母屋の東側にコウエ(納屋)があり、チヨウズバ(大便所)が付属している場合



明治・大正期の農家

が多い。

## 四 ことばの分布

女の子の伝統的な遊びである。お手玉の呼び方は、全国で三百種ほどの語形があるといわれる。勿論これらが同じ比重で分布しているわけではない。お手玉のおおぶことばとしてオヒロイをあげることもできる。しかし、それは市域の東部(横根・北崎地区)で多く使われているに過ぎないものであった。

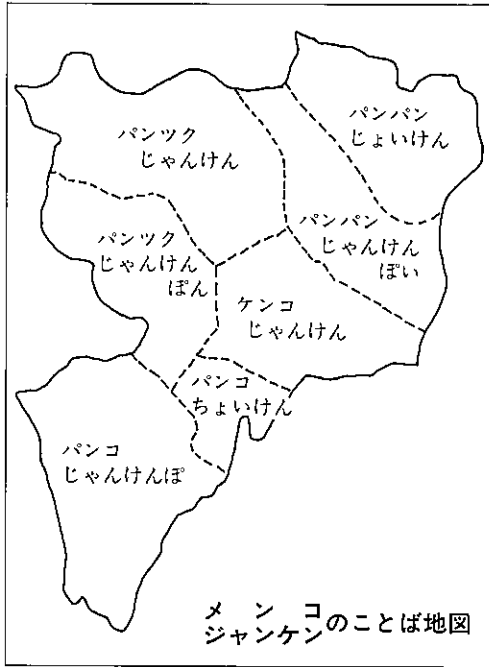
### (一) お手玉

お手玉をオヒロイというのは、横根・北崎地区が中心である。その他の地区では、古くはオヒトツとか、オタンコロ・オジャミなどがあったが、かなり以前からオテグマと呼んでいた。

### (二) メンコ

子どもの遊びは、小学校区を単位として流行がある。それとともに、その遊び方や呼び名も、わずかながら違いがあるようである。その顕著なものとして、男の子の古くからの遊びであるメンコをあげる事ができる。

メンコのおおぶことばには、ケンコ・パンコ・パンツク・パンパンの四種類がある。それが、第一小学校区(大府地区)がケンコ、



第二小学校区（横根・北崎地区）がパンバン、第三小学校区（共和・長草地区）がパンツク、第四小学校区（吉田・森岡地区）がパンコというように明瞭に旧小学校区別に分布している。

なお、メンコやビー玉（カッチンダコといった地区もある）で遊ぶとき、メンコやビー玉そのものを賭けて、勝った方がそれを取ってしまうことになる。子どもたちは、より多くのメンコやビー玉を集めることに熱中した。

ところが、「そんな小さな子とホンコでやっちゃあかわいそうだ。ウソコにしとけ。」という場合もある。ホンコは、本来の方法で勝負をすることを意味している。それに対して、ウソコというのは、賭けをしないで、うそ（偽り）の遊びのことをいった。

### (三) ジャンケン

ジャンケンには、ジャンケンポ・ジャンケンホイ・チョイケン・ジョイケンなど地域差がわずかながら認められる。

ジャンケン遊びに、グーチョキパーがある。これも、地域や年代の違いによってグービーパーとかグーペーパー・ハーグーチョキなどの変化がみられる。

### (四) 片足跳び

片足跳びのおおぶことは、チンガラとチンギリで、市域の東西に分かれて分布している。



ジャンケン

### 参考資料

- ・愛知県方言集（黒田鉦一）
- ・東海のことば地図（竹内俊男）
- ・東海の言葉事典（鈴木勝忠）
- ・名古屋言葉地図（山田秋衛）
- ・日本の方言地図（徳川宗賢）

## 五 おおぶことば

## ア

アイサ	普段	これはアイサに着るものだ。
アイマチ	怪我	古釘でアイマチをした。
アオハチ	青初茸	アオハチがたくさんとれた。
アカモト	たなご	この池はアカモトがよくつれる。
アカン	駄目	そんなことをしたらアカンギゃあ。
アガリハナ	家の上り口(小縁)	アガリハナに腰掛けて話した。
アクト	かかと	靴ずれしてアクトが痛い。
アゲナ	あのような	アゲナこととしては危険だ。
アジナイ	まずい	これはアジナイ煮物だ。
アジハン	五目飯	アジハンを茶づけにして食べる。
アツラ	あたり	そこらアツラをよく探せ。
アトグチ	田水の落し口	アトグチにどじょうがいる。
アダニ	案外に	アダニ大きい魚だ。
アラス	新品	この靴はアラスだ。
アラスカ	あるものか	そんなものアラスカ。
アリタケ	全部	アリタケの力を出す。

## イ

イカキ(イカケ)ざる

洗った米をイカキに入れる。

イケル

埋める

庭にごみをイケル。

イコ

そんなに

きょうはイコ食べないな。

イズミ(イサ)

わらずと

おひつをイズミに入れておく。

イセクル

からかう

犬をイセクルと危険だ。

イタコ

絞り作業

イタコに精を出す。

イチコロ

一度で負ける

きょうの大会はイチコロだ。

イツコーニ

なかなか

待っているのにイツコーニ来ない。

イツツカ

すでに

そんな仕事はイツツカすんだ。

イッピアー

一面に

菜の花がイッピアー咲いている。

イナウ

荷負う

びくをイナウ。

イナガラ

容易に

心配せんでもイナガラできるよ。

イヌゴ

リンパ腺肥大

股にイヌゴができた。

イネ

寝相

弟はイネが悪い。

イヤガラス

いじめる

小さい子をイヤガラスな。

イロム

熟す

柿がイロム。

インゴウ

頑固

父はインゴウな人だ。

## ウ

ウイトコ

ようやく

ウイトコ木に登れた。

ウセル

現れる

急にウセル。

ウソコ

偽物

これはウソコの試合だ。

ウツクシイ

すっかり

おかずをウツクシク食べた。

第二節 地域語

ウツル 似合う  
ウマ 踏み台

帯が着物によくウツル。  
ウマを使って棚の箱をとる。

エ

エーコロ 適当に  
エートコ 富家  
エライ づらい  
エラマツ えばった人  
エロー 大変な(に)

エーコロに仕事を片付ける。  
あの子はエートコの子だ。  
これはエライ仕事だ。  
隣の親父はエラマツだ。  
きょうはエロー疲れた。

オ

オーゲイ 満足  
オータイズ 雑  
オーダカナ 高菜  
オカラ 豆腐粕  
オガラカス いじめる  
オキヤー やめよ  
オコリバス よく怒る人  
オシヨロイサン 精霊  
オソソソ お粗末  
オゾイ 粗悪な  
オンガイオンギヤシ 恐ろしい

大御馳走にオーゲイする。  
あの子は仕事かオータイズだ。  
オーダカナのおしたしをつくる。  
オカラを煮る。  
小さい子をオガラカスな。  
そんなことオキヤー。  
あの子はオコリバスだ。  
盆にはオシヨロイサンを迎える。  
オソソソさまでした。  
これはオゾイ品物だ。  
それはそれはオンガイ話だ。

オゾム ためらう

溝を跳び越すことをオゾム。

オダ 無駄話

女の子が集ってオダしている。

オチヨクル からかう

大人をオチヨクルものでじゃない。

オチヨケル おどける

あの子はオチヨケてばかりしている。

オトシチオトクチ玄関口

オトグチから入ってください。

オトコバス おてんば

あの女の子はオトコバスだ。

オツカラカス 倒す

木をオツカラカス。

オナオナ わざわざ

遠方からオナオナ来てくれた。

オヒマチ 会食

きょうは隣組のオヒマチをする。

オヒロイ お手玉

オヒロイで遊ぶ。

オブクサン 御仏供

仏壇にオブクサンを上げる。

オヘギ(オヘゲ)かき餅

オヘギを焼いて食べる。

オボロコブ とろろ昆布

汁にオボロコブを入れる。

オヨメ かつぶり

池にオヨメが泳いでいる。

オンカオクリ 虫送り

六月にオンカオクリをする。

カ

カイシヨ 力量

カイシヨのある人だ。

カイワル ふ化する

ひよこがカイワル。

カエドリ 魚捕り

小川でカエドリをする。

カカリド 居候

いまは叔父の家のカカリドだ。

カケズル 駆け回る

犬が庭をカケズル。





セトグチ	裏口	セトグチから出る。
セシ	先刻	それはセシにしたことがある。
センダツテ	この間	センダツテはありがとう。
ソコラジュー	一面	ソコラジューにごみが落ちてている。
ソソクウ	繕う	足袋の破れをソソクウ。
ソブ	水さび	この井戸はソブが出る。
ゾレル	崩れる	大雨で崖がゾレル。
タアーグアー	わざわざ	友人がタアーグアー尋ねてくれた。
タイゲ	面倒な	これはタイゲな仕事だ。
タイドコロ	居間	タイドコロで寝そべる。
タシナイ	少い	水がタシナイので大切に使う。
ダチカン	駄目な	そんな仕方はダチカンなあ。
タボケル	熱中する	弟は野球にタボケル。
タマリメシ	五目飯	タマリメシを茶漬けで食べる。
トラズマイ	不足分	トラズマイを借りる。
タルイ	つまらない	これはタルイ映画だ。
タンチン	うすばか	そんなことをする子はタンチンだ。
チートナイ	少しの間	痛いけどチートナイがまんせよ。
チミキル	つねる	腕をチミキル。
チヨゴム	しゃがむ	そんな所でチヨゴムな。
チャット	急いで	この仕事はチャットやってくれ。
チョットモ	いっこうに	待っていてもチョットモ来ない。
チョビットチョット	少し	残りはチョビットしかない。
チヨロイ	のろい	あの人は仕事がチヨロイ。
チヨロイ	簡単な	これはチヨロイことだ。
チンギリ	片足跳び	チンギリで競争しよう。
チンジュウ	(チンガラ) 縮れ毛	あの人の髪はチンジュウだ。
チンチン	熱い状態	湯がチンチンになっている。
ツギ	布	ズボンの破れにツギを当てる。
ツクナル	かがみ込む	腹痛で道端にツクナル。
ツクネル	(雑然と)重ねる	洗濯ものをツクネル。
ツム	こる	肩がツム。
ツボ	たにし	田んぼへツボを捕りに行く。
ツボケ	稲村	畦道にそってツボケをつくる。
ツボノウチ	小庭園	ツボノウチに水をうつ。
ツル	持ち運ぶ	二人で机をツル。

第二節 地域語

トコ	所	ボールがこんなトコにあった。			
ドゲン	どのように	悲しい顔してドゲンした。			
ドカス	移動する	じやまな置物をドカス。			
ドエライ	大変な	これはドエライ仕事だ。			
トーモ	田畑	母はトーモへ行った。			
ドデー	非常に	ドデー大きな魚を捕らえた。			
ドゾコゾ	どうにか こうにか	ドゾコゾ完成させた。			
テンベツ	魚籠	魚をテンベツに入れておく。			
テンバ	上面	木箱のテンバをみがく。			
デシヨ	小皿	おかずをデシヨに盛りつける。			
デスコ	おでこ	弟はデスコが大きい。			
デベソ	出歩き好きな人	おばあさんはデベソだ。			
デモノ	諸税	今月はデモノが多い。			
デングラカス	ひっくり返す	急いでいてびんをデングラカス。			
デシクルマ (デシクルマ デシノン)	肩車	赤ちゃんをデシクルマする。			
テンペツ	魚籠	魚をテンペツに入れておく。			
トコダイ	縁台	トコダイにかけて夕涼みをする。			
トゴリ	煮凝り	長くたつたのでトゴリが出た。			
トコロ	自村	これはトコロの店で買った。			
ドツク	殴る	弟をげんこつでドツク。			
トチ	どんぐり	トチをたくさん拾ってきた。			
トナダ	戸棚	ふかしいもがトナダにある。			
ドヒョー	びく	野菜をドヒョーに入れる。			
ドベ	最下位	運動会の競争はドベだった。			
トロイ下ロクサイ	ばからしい	そんなトロイ話をするな。			
トロカス	溶かす	ろうをトロカス。			
ドンドヤキ	たき火	落葉でドンドヤキをする。			
ドンボチ	小池	わき見していてドンボチに落ちる。			
ナリタケ	なるべく	会議にはナリタケ出てほしい。			
ナル	丸太	ナルをしばりつける。			
ナンゴ	柔軟な	叔父はナンゴな人だ。			
ニ					
ニゴシ	米のとき汁	ニゴシを畑にまく。			
ニッスイ	間がぬけている	あれはニッスイ男だ。			
ニワ	土間	父はニワで縄をなっている。			



ヌクトイ	ヌ	暖かい	きょうはヌクトイなあ。	ハンゾ	浅い桶	ハンゾで顔を洗う。
ネガル	ネ	くさる	玉ねぎがネガル。	ヒアゲ	忌明け	ヒアゲでお経を上げる。
ネキ		側	一本杉のネキで遊ぼう。	ヒキズリ	鍋物	今夜はヒキズリにしよう。
ネブカ		ねぎ	母がネブカをきざむ。	ヒゲモジャ	ひげの濃い	ヒゲモジャの顔だ。
				ヒズ	生氣	いつものようなヒズがない。
				ビタンコ	濡れた態	雨でビタンコになった。
				ヒッシャグ	つぶす	空箱をふんづけてヒッシャグ。
				ビッシリ	いっぱい	箱におもちやがビッシリだ。
				ヒトコ	いっしょ	食べ残りをヒトコにする。
				ヒドロイ	まぶしい	太陽の光にあたってヒドロイ。
				ヒヤコイ	冷たい	これはヒヤコイ水だ。
				ヒルトンビ	昼間の盗人	ヒルトンビに入られた。
バカニ	ハ	はなはだ	それはバカニおもしろい話だ。			
ハザ		稲架	稲をハザにかける。			
ハサゲル		差し込む	手ぬぐいを帯の間にハサゲル。			
ハシリアイ		徒競争	ハシリアイで一等になった。			
ハソリ		大鍋	ハソリで味噌汁をつくる。	フ		
バツカ		ばかり	わたしバツカ注意される。	フカダ	湿田	フカダは耕作になんぎする。
ハバ		半端	割り切れずにハバが出た。	ブチャカル	ひっくり返る	おもちや箱がブチャカル。
ハム		しゃがむ	腹が痛くて道端でハム。	ブットク	捨てておく	泣く子をブットク。
ハラギリ		充分	ハラギリご馳走になった。			
バラズシ		散らし	ご馳走にバラズシをつくる。			

第二節 地域語

ベエー	否	そんなことをするのはベエーだ。
ベト	泥	溝のベトをさらえる。
ベト	最下位	徒競争でベトになった。
へホイ	弱い	兄は勝負にへホイ。
ベロ	舌	妹はしかられてベロを出した。
ホ		
ホイヤー	鬼ごっこ	ホイヤーをする。
ボウ	追う	犬をボウ。
ホカル	捨てる	ごみをホカル。
ホッカラカシ	放りっぱなし	ボールがホッカラカシになっ ている。
ホッカラカス	ぶっ倒す	古木をホッカラカス。
ボッコ	ぼろ布	ボッコを廃品回収に出す。
ホトクレ	懐	財布をホトクレに入れる。
ホボカ	あちこち	学用品がホボカに散らかっ ている。
ホロ	餅菓子(あられ)	おやつにホロを食べる。
ホロポロ	湿疹	顔にホロポロができた。
ポングイ	杭	土手にポングイを打ち込む。
ポンツク	魚捕り	小川でポンツクをする。
ホンノリ	すっきり	空がホンノリ暗くなった。
マ		
マタイ	確實な	あの大工はマタイ仕事をする。
ママス	弁償する	こわしたものはママしてやれ。
マメ	健康	おじいさんはマメな人だ。
マワシ	準備	仕事のマワシをする。
マンガ	雁爪	田の草取りにマンガを使う。
マントウ	駆け馬	神社でマントウ祭りをする。
ミ		
ミエル	おいでになる	お宅のお父さんは家にミエルか。
ミヤーハイ	もうじき	夕刊はミヤーハイ来るだろう。
ム		
ムゲタ	乾田	ムゲタは裏作ができる。
ムシヨーニ	むやみに	ムシヨーに怒れてくる。
ムツキ	おむつ	母がムツキを洗う。
ムッサラコイ (ムサラコイ)	むさくるしい	あ人の家はムッサラコイ。
メ		
メツソ	目分量	橋の長さはメツソで二五米だ。
メンボ	ものもらい	メンボができて痛む。



ワヤク	ワヤ	ワニク	ワ	ロジ	ロ	レ	ル	リ
やんちゃ	無茶	いたずら		浅い料理箱				
あの子はワヤクな子だ。	そんなワヤをするな。	弟はワニクをよくする。		切り餅をロジに入れる。				

六 おおぶ訛

アイサ	アイマチ	アカリイ	アキヤー	アセホ	アツツイ	アヤスイ	アンダケ	アンテラ	アンバヨ	ア
あいだ	あやまち	あかるい	あかい	あせも	あつい	たやすい	あれだけ	あまでら	あんばいよく	
(間)	(過ち)	(明るい)	(赤い)	(汗疹)	(暑い・熱い・厚い)	(容易い)	(尼寺)			

イエル	イガム	イキヤウ	イゴク	イゲ	イスグ	イスル	イ
うえる	ゆがむ	いきあう	うごく	ゆげ	すすぐ	ゆする	
(植える)	(歪む)	(行き逢う)	(動く)	(湯気)	(濯ぐ)	(揺する)	

イッピアー	いっぱい	(二杯)
イッポド	よつぼど	(余程)
イナウ	になう	(荷負う)
イビ	ゆび	(指)
インピツ	えんぴつ	(鉛筆)

ウエン	ゆえん	(油煙)
ウナイドシ	おないどし	(同じ年)
ウツソ	うそ	(嘘)
ウデル	ゆでる	(茹る)
ウツスイ	うすい	(薄い)
ウツクシイ	うつくしい	(美しい)
ウワミヤ	うわまえ	(上前)
ウンナシ	おなじ	(同じ)

エ	いぶす	(燻す)
エブス	いれもの	(入れ物)
エレモン	いれる	(入れる)
エレル	えんぴつ	(鉛筆)

オオシ	おし	(啞)
オシイ	ほしい	(惜しい・欲しい)
オソエル	おしえる	(教える)
オッサン	おしょうさん	(和尚)
オバグルマ	うばぐるま	(乳母車)
オミヤ	おまえ	(お前)
オンカ	うんか	(雲霞)

カタヤ	かたい	(堅い・硬い)
カヂカム	ちぢむ	(縮む)
カミスリ	かみそり	(剃刀)
カヤス	かえす	(返す・帰す)
カラド	からだ	(体)

キ	き	(黄)
キイカン	きんかん	(金柑)
キセロ	きせる	(キセル)
キモン	きもの	(着物)
キヤッコ	かいこ	(蚕)
ギヤッコク	がいこく	(外国)

第二節 地域語

サ サバイ	サ サビシイ	サ ゴンボ	コ コッスイ	コ コッチ	コ コナイダ	ケ ケツネ	ケ ケブイ	ケ ケヤス	ク クマゼ	ク クツサイ	ク クチピラ	キ キンニョー
さむい	さみしい	ごほう	こすい	こちら	このあいだ	きつね	けむい	けす	くまで	くさい	くちびる	きのう
(寒い)	(淋しい)	(午夢)			(この間)	(狐)	(煙い)	(消す)	(熊手)	(臭い)	(唇)	(昨日)

ソ ソイダテ	ソ ソーレン	セ セバイ	ス スリコケ	ス スル	ス スケナイ	シ シヨウチユー	シ ジョーリ	シ シャーフ	シ シミヤー	ジ ジバン	シ シビヤー	シ シトエ	シ シト	シ シシ
それだから	そうれい	せまい	すりこぎ	そる	すくない	しじゅう	ぞうり	さいふ	しまい	じゅばん	しばい	ひとえ	ひと	ひし
	(葬礼)	(狭い)	(摺子木)	(剃る)	(少ない)	(始終)	(草履)	(財布)	(仕舞い)	(襦袢)	(芝居)	(単衣)	(人)	(菱)

第二章 土地とことば

タ タアラ タカエル タテゴ タルイ	タ たわら かかえる たてぐ だるい	(俵) (抱える) (建具) (怠い)
チ チャマガ チョットモ	チ ちやがま ちつとも	(茶釜)
ツ ツベタイ	ツ つめたい	(冷たい)
テ デキモン テノゴイ デヤコ テンマリ	テ できもの てぬぐい だいこん てまり	(出来物) (手拭い) (大根) (手毬)
ト ドウナト トゾク	ト どうなりと とどく	(届く)
トボス トヨ トンギラカス	ト ともす とい とがらす	(灯す) (樋) (尖らす)
ナ ナゼル ナンシニ	ナ なでる なにしに	(撫でる)
ニ ニヤウ ニヤ ニヨイ	ニ にあう ない におい	(似合う) (無い) (匂)
ヌ ヌスト ヌスブ	ヌ ぬすびと むすぶ	(盗人) (結ぶ)
ネ ネフタイ	ネ ねむい	(眠い)
ノ ノグ	ノ ぬぐ	(脱ぐ)

第二節 地域語

ハサグ	はさむ	(挟む)
バック	ばかり	
ヒカル	しかる	(叱る)
ヒク	しく	(敷く)
ヒチャ	しちや	(質屋)
ヒックイ	ひくい	(低い)
ヒッソ	しっそ	(質素)
ヒトラゴ	ひとりご	(独り子)
ヒボ	ひも	(紐)
ヒヤー	はい	(灰)
ヒヤール	はいる	(入る)
ヒラッペタイ	ひらたい	(平たい)
フシヤク	ひしゃく	(柄杓)
フルシキ	ふろしき	(風呂敷)
ブルクス	つるす	(吊す)
ブイ	ぶゆ	(蛎)
フ		
フント	ほんとう	(本当)
ヘッチン	せつちん	(雪隠)
ホーダラ	そうだらう	
ホイデ	それで	
ホッカ	そうか	
ホトクレ	ふところ	(懐)
ホトル	ほてる	(火照る)
ホ		
マアハイ	もうはい	
マイゲ	まゆげ	(眉毛)
マギル	まがる	(曲る)
マツト	もつと	
マッペン	もういつペン	
マンダ	まだ	(未だ)
マ		
ミアーニチ	まいにち	(毎日)
ミシル	むしる	(撈る)
ミ		



第二章 土地とことば

ヤ ヤアーキョー ヤアーラシイ ヤッスイ	モ モダコト モン	メ メゾ メメズ	ム ムイカラ ムカゼ ムラウ	ミ ミシロ ミヤール	ワ ワラニゴ	ヨ ヨド	ユ ユミ
あいきょう いやらしい やすい	むだこと もの	みぞ みみず	むぎから むかで もらう	むしろ まいる	わらみご	よだれ	いみ
(愛敬) (嫌らしい) (安い)	(無駄事) (物・者)	(溝) (蚯蚓)	(麦稗) (百足) (貰う)	(蕨) (参る)	(藁みご)	(涎)	(忌)